

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第42巻第3号 二〇〇七年三月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』 「ザコパネ」

大いなる静寂のうちに霧が開け、ちりぢりになってゆく。するとそこに、
雪をいただいたたおやかな連山が姿を現わす。

クラクフに長居しすぎた。とうとう、自分の手が届く限界が見えてきて、出立するか、それとも、降参してこの都市にとけ込むか、決めなければならぬ時が来たのだ。そういうわけで、私は馬車を呼ぶことにする。ひとつの都市との別離の責め苦がはじまる。とはいえ、それは別れの悲しみのことではなく、弱者に課税するようなやり方でチップを強要する、厚顔なホテルの従業員たちとの戦いのことだ。私は保護を失い、突然、見放されて、得体が知れない者たちの手に委ねられるのだ。この種の人間に対処しなければならぬことから腹立ちで、出立前夜はいつも憂鬱な思いをさせられる。ワルシャワでは、部屋係のメイドが——このメイドは既にいわくありげな手まねを私にしてみせたことがあった——私を訪ねてきたあるポーランド人に、一週間ごとに彼女にチップを支払うように、と伝えさせた。支払うように、と。同じホテルのボーイは、私の部屋の並びを担当していた彼の同僚が私の靴を磨き忘れたので、朝、私の靴を磨かなければならなかったのだが、私が五十グロツシエン与えたところ、彼は手の中に目をやって頭を振った。彼は無言で、一歩も動こうとはしなかったが、もう五十グロツシエンを手に入れたと、ようやく立ち去った。レムベルクで私のトランクを運び下ろした部屋付のボーイは、私の乗った辻馬車から離れようとはせず、脅すように手を馬車の中に突っ込んできた。「少なすぎます。少なすぎます。」彼はこの荷物の運び下ろしで、トランクを他のボーイに駅まで二度運ばせるよりもたくさんもらっていたのだ。

さて、クラクフで、私は早朝、暗澹とした気持ちでホテルの階段を下りてゆく。ここは居心地が良かった。だが、今この時から、私は客ではなくなるのだ。私は追放され、鞭打ちの刑を受けなければならないのだ。不思議なことだが、出立の噂はあつという間に従業員の間に広まってしまふ。昨夜、私は夜勤のフロント係りにその旨を伝えたのだが、今日はホテル中がこのことを知り、盗賊騎士の群れと化している。トロヤ陥落を知らせるアガメムノンの狼煙制もこれには敵わない。階段を行くとき——階段にはきれいな絨緞がきちんと敷かれている——いつもは

人に会うことはない。床を掃除している者がいたとしても、身体を起こすこともなかったし、道を空けてくれることもなかった。だが、今回はすべての道が包囲されている。「やつはこの谷あいの道をやってくるにちがいない。」部屋の張り紙だけをとおして、その存在をおぼろげに感じていたにすぎない人たちが、全員待ち受けているのだ。そこには、ボーイ、部屋付のメイド、給仕がいて、各人それぞれベルの呼び出し音が異なる、と注意があった。私の出立は彼らの総点呼を意味する。彼らはいつもは他意なく、あちらこちらで仕事をしていた。彼らは白いエプロンをしていたり——この場合は部屋付のメイドだ——、あるいは、緑のエプロンだったり——これはボーイだ——、あるいは、申し分のない黒の燕尾服を着た給仕たちが、私の部屋ではないが、部屋から食器を運び出して、その際にメイドの誰彼といちゃついたりして、軽快に素早く階段を下りて行った。だが、今回は通してもらったために、通行料、通過料を支払わなければならないのだ。いまいまいしく思いながらも、最後にこのホテルの水を一口飲んでから、私は部屋のドアを開け、足音を忍ばせて絨緞敷きの廊下に行く。

シヴァ神よ、どんな災厄が待ち受けているのでしょうか。きっと私は切り抜けるつもりだ。半時間後には——考えがたいことだが——轟音をあげて疾駆する列車の中に座り、ザコパネに向かっているだろう。これから起こることは、半時間後には、遠いところでの出来事になっているだろう。その時、最初の挨拶の声が上がり、火蓋が切られる。「おはようございます。」すぐさま二人目の挨拶が続く。私が通らなければならない丁度その時に、絨緞の掃除を中断できるとは、この狡猾な女たちはなんと愛想がよいことだ。女たちはもう身体を起こして、微笑んでいる。期待にみちた微笑み。女たちのこの微笑を私は知っている。それは自分たちの下劣さを隠す見せかけだ。女たちは突撃ラッパを吹き鳴らし、攻撃を開始する。この微笑をとどめさせておくことに成功しなければ、人をばかにしたような口付きで攻撃を受けるのだ。思っただけでも身震いするような侮辱だ。「どちらの方が私の部屋を担当

してくださったのでしょいか」と私は尋ねる。一人がすぐさま笑顔を作り、型どおりに前に出てくる。手を空けるために、ほうきを置いてある。いまましい微笑を止すように、ほうきを顔の前にもってこなかったのは残念だ。女は紙幣を一枚手に入れ、それに目を注ぐ——そして、私は試験に合格したのだ。女盗賊はうなずいている。眼を輝かせてうなずいている。感無量の面持ちで何かポーランド語を喋っている。もう一人の女もうなずいている。女たちは金を手に入れ、私の命は助かったのだ。私の部屋は三階だ。まだ狭い廊下が二箇所ある。が、そこには人はいない。主たる障害が階下にあることは分かっている。そこには、ホテルがサーヴェイスという控え目な名目で雇い入れ、私の部屋につながる呼び鈴の回線をあずかっていた盗賊騎士たちによって、バリケードが築かれているのだ。階下では、彼らはずらりと二列に並んでいるだろう。玄関まで、いや馬車のところまで、鉄びしを撒いて、彼らは私の一步一步を妨害するのだ。

フロント係りに会計を頼む。係りは不吉にも涙をすすりながら、「すぐにいたします。」私は待っている。時々、彼は有罪宣告を受けた者でも見るように、じろじろ値踏みするような眼で私を見る。そして、タバコを吸い、口笛を吹いては、見習いのボーイを呼んで、平静を装っている。いつもより多くの人間が、仕事に精出しているふりを装って、実は待ち伏せして、ロビーをうろついているのを認める。玄関ドアのところまですつかり固められているのだ。このドアは四分割された回転ドアで、そこに少年が二人立っている。少年の一人がある操作をすると、私がドアの中に閉じ込められることはお見通しだ。すると、別の一人が次の動きをするのだ。その前に、皆が帽子を脱いで、手を差し出すだろう。もらった額が気に入らないと、彼らは私を回転ドアの中に閉じ込めたままにして、ロビーでコーヒーを飲みながら、今日中には錠前師を連れて来ますよ、今、寝てますんで、と言うのだ。本当にこのホテルはお節介で、ドアのところを少年を四人配置するようなこともしかねない。おそらく、他の二人は別のドア

で私と同じような境遇の人を襲うだろう。突然、フロント係が大声で、「勘定書は向こうの部屋付のメイドのところにご用意できております」と告げる。メイドのところとはどういうことだろう。メイドにはたった今、会ったところじゃないか。それは最初の関門突破だったはずだが。あの不愉快なメイドがまたここに現れて、もう一度、微笑むのだろうか。啞然としつつも、信じられずに、ためらいながら向かいの部屋に近づいてゆく。そこには、一人の中年女が書類を持って机のそばに立っている。それで、あの部屋付のメイドはどこにいるのだろうか、と私は考える。女は、ポーランドではどうやらドイツ語らしいと言われ、ドイツでは間違いなくポーランド語だと言われるような話し方で、私に話しかけてくる。女が言うには——私はといえば、すっかり混乱してしまい、何ともはや茫然自失の状態に陥ってしまったのだが——自分が部屋付のメイドだ、本当に自分だ、以前から三階の私の部屋を担当してきたメイドで、他の誰でもない、と言うのだ。

私は考えを集中する。「あなたはいったいどのようなようにして階段を下りてきたのです？ それに——。」

「それに何ですか」

「それに、あなたは違うふうに見えたのですが。上で。もつと若く。ほうきを顔に、いや手に持っていました。」

「私がほうきをですって？」

「ええ、あなたは変わってしまった。急に老けてしまいました。ここで何が起こっているのでしょうか？ どういうことでしょうか？ あなたはどのようなようにして階段を下りてきたのですか？ 下りる時に、何かあったのですか？ それに、いったいぜんたい、何がお望みなんですか？ だって、もう上で——」

その時、ドアが開いて、先ほどの若いメイドがちらりと中をのぞき、一瞬の間に飛び退く。私は落ち着きと平静を取り戻す。「そういうことですか。奇襲攻撃でしたか。」

私は怒りをぶちまける。「あの人が部屋付きのメイドでしたよ！ 彼女がメイドです。あなたじゃない。あなたはちっとも老けてしまったんじゃない。ここにいて、待ちかまえていたんだ。前からもう年取っていたんだ。ずっと前から。やり方もよく心得ている。」女は哀れむように二三の言葉を私にかけて、フロントを呼ぶ。フロント係りは、ドアのところからじろじろ異端審問のような厳しさで私を眺めながら、彼女がずっと昔からのメイドです、と高飛車に言う。それから、腕を組んで、ナポレオンのような格好で、敷居から離れない。彼と女が視線を交わしている。何をたくらんでいるのか。私は広い室内で孤立する。窓から飛び出そうか。ベルリンには消防隊と緊急出動隊がいる。ここからベルリンに電話できないことは、昨日、問い合わせで聞いた。カトヴィツツからでないと電話できないのだ。カトヴィツツまで馬を駆って、緊急出動隊に急を知らせようか。何もできないことへの怒りが募ってくる。怒りは私を圧倒し、それでも何かをなしうるまでに増大してくる。私は勘定書を要求する。私は大声でしゃべり始める。滅法な大声で、まぎれもない叫び声をあげて。それは怒りを装ってはいるが、急場の叫びだ。私は勘定書以外のものは何も要求しない。私には、このホテルのメイドの変身も、突然の老化も、部屋付きメイドの重複性も、どうでもいいことだ。私は神智学者じゃあない。そして、支払いをし、そして、わめきたてるのだ。分厚い札入れが外套から出てくる。有難いことに紙幣がいっぱい入っている。フロント係りと女の前で、恥ずかしげもなく、持っているお金をさらけ出す。すごい額のお金だ。ドル紙幣もある。彼らはあつかましくも一瞬間、微みを作ろうとする。だが、私は、建物が礎石から震え、客がベッドから飛び出してきてドアがうち開かれ、各階から悲嘆の声があがればかりに、勘定書の金額を叩きつけてやる。もう一度、追加を叩きつけてやる。窓ガラスは道路に碎け落ち、エレベーターが飛び上がる。その爆鳴に女がぎよっとする。私自身も自分にぎよっとする。激怒すると気持ちがいい。女の入歯が私をよく観察しようとしてむき出ている。私は戦利品のように勘定書

をひらひらさせながら、部屋を出る。ボーイはドアのところでトランクを持って、震えながら私を迎える。少年たちは消えてしまった。回転ドアはひとりでに動きだす。私は馬車の中だ。目の前には御者の背中がある。きつと、お前さんも打ち負かしてやる。

今、ザコパネはシーズン・オフだと人に教えられた。だが、ザコパネはいつでもシーズンだ。何であれ、いつでもシーズンなのだ。光と熱に自然を感じ取ることができるよう、雨、霧、雪、霰にも自然を感じ取ることが出来る。鶏は、元気な時も、病気の時も、鶏だ。通常の美では、私は脳炎にかかり、睡眠病をわずらってしまう。夜のうちに霜が降りていた。切り株の残った草地がまだらに見える。私は小型のトランクと黄色の書類かばんを持って旅している。私に喜びばかりでなく、激しい心痛をももたらせた、あの厄介ないかめしい緑色の衣装トランクには、一枚の切符を買ってやって、別れを告げた。トランクをつかむというより、私の心をつかもうとして、それに貪欲に飛びついたボーイたちは皆恨みに思うだろうが、そのトランクを私はダンツイヒへ送ったのだ。それはダンツイヒで私を待っているだろう。国境の遮断機ごしに私はそれに挨拶を送り、それから一緒に仲よく帰国するのだ。

高木も低木もすっかり葉を落とし、枝が虚空に黒く突き出ている。木々は裸で、寒気にさらされ、ちぢこまっている。うつつら青みをおびて連なる丘陵には、決まってそのような木立がある。凍死するにちがいないところだが、樹木は利口で、その前に活力を匿して、死んだふりをしているのだ。上に立っているのは、空き家になった夏の住居にすぎない。長くつづく山間の平地では、淡青色に塗られた家々が過ぎてゆく。木造の家で、屋根が低く古い。山と丘陵がしだいに高くなっているような気がする。それらの藍色の斜面の所々には幅広く黄葉が見られる。

と、今度は小さな丘陵から縦の林がまっすぐに下りてくる。赤い瓦屋根が妙に目ばゆい。壁は青色だ。落葉した森林に入る。直立した無数の枝をもつそれらの木々は、叫び声を上げているかのようだ。黒い、粗暴な、不穏な嘆願。そこにはおあつらえむきにカラスたちが止まっついていて、幹の近くで頼りない足どりで飛びあがり、どさっと地面に下りている。しだいに黒い縦の山が近づいてきて、今ではその一本々々を識別できるほどだ。中には赤みをおびた広葉樹も混じっている。白い空を背景に、森はさまざまに奥行きを変えて、驚くほど立体的で造形的だ。幹がだんだんに小さくなり、丸みをおびたままで、ずっと奥へと続いてゆく。この遠近法には驚かされる。立体鏡で見るとような光景だ。けれども、これは序曲にすぎなかった。

私が目覚めつつあるのか、それとも風景が目覚めつつあるのか。それはさらに豊かに変転してゆく。なだらかな丘や連なる山々には、切り株の残った畑があるのだが、赤みがかかった茶色の切り株の中には緑の草か苔が生え、その表面全体が白く霜でおおわれていて、妙に繊細な色調が現れている。白が独特の雰囲気をかもしだしているのだ。切り株と畑地の代赭色が勝つかと思うと濃い緑が勝つ。白い息吹が付与する魅力によって、それらの色が濃くなったり淡くなったり、あるいは消えたり現れたりする。霜が田畑と苔と切り株に統一をもたらし、陰翳を与えているのだ。

黒くそびえる連峰が、赤い屋根や教会とともに、何度も近づいては遠ざかってゆく。谷が現れる。湖がある。周囲が白い。塩の結晶ができたかのようだ。だが、それは氷で、湖の真ん中は暗い空虚なくぼみになっている。景観は目まぐるしく移り変わってゆく。その様は驚くばかりだ。眼を離すことができない。突然、真つ赤な紅葉におおわれた斜面が現れる。空は雪模様のようにどんより曇り、はるか行方は灰白色に明るんでいる。そして、蒼黒の山間の右から左から、ひよろひよろ飛ぶように細長い畑地が近づいてくる。それに続いて、炎のように赤い木立や低

木の茂み。どうしたとか、私は、数分毎に近づいては去ってゆくこれらの斜面を、興奮し、夢中になって観察している。樹の幹や草の茎、低木林のもつ造形性、具象性、三次元性がきわめて明瞭に感じられるのだ。先ほども、縦の林でそうだった。窪地や峡谷でそれらが盛んに群生している。いたるところに空間がある。いたるところで何か空間を占め、他から隔絶し、あるいはその一部となっている。そして、色をおびて、風に揺れているのだ。それらが斜面に立ち、枝や茎を見せているその様には、ある偉大な秘密が、独特の精緻な内密性が蔵されている。後になってみて、あたかもこの瞬間に、空間の真髓が私に触れたかのように私には思われるのだ。

列車に揺られて二時間になるが、もっと長く感じられる。二時間前には、まだホテルのロビーに座っていたのだ。列車は煙の立ちのぼる、白粉をつけたような小さな村々を飛ぶようにかすめて、ぐんぐんと丘陵を登り、カタカタと縦の森を突っ切ってゆく。下の方に、黒い幅のある川が流れている。細流は凍てついて、茂みがそれらを丸天井のようにおおっている。人里はなれた家から、男たちが出てくる。ぶ厚い褐色の上着に、黒い山高の帽子をかぶり、裏手の畑のほうへ折れて行く。話しをしながら、杖を振っている。畑は霜の下で明るいまごとな萌黄色をおびている。玩具のような黒馬が木材運搬馬車を引いて、街道を走ってゆく。やがて、一帯は蒼く翳った山々がもたらず濃い緑と、赤みをおびて輝くようなこずえの黄にとってかわられる。

長い間、多様な風景が揺れながら通り過ぎてゆく。風景は青ざめ冷えきっているように見える。どうやら私は眼を閉じて眺めていたのだ。霜はごく小さなものにも、注意深く、驚くほど繊細な輪郭を与えている。この駅はヨルダノフという。ここで一条の光が、ちょうど右手の雲間から射してくる。白く眩しい、冷たい光だ。私は先ほどから太陽の存在には気がついていて、窓についた花模様の氷の結晶がぼやけていたのだ。それらの筋は溶けて流れとなり、ちょうど羽毛がくっついて激しく揺れていたところで膨らみをつくり、したたり落ちていった。太陽は雲の

背後のはるか彼方にあつてほとんど見えないけれど、なんと素晴らしく、恐ろしい力を持つて居ることか。太陽がさらに姿を現し、結晶が溶けて、私を楽しませてくれる。生とはそのようなカオスのことなのだ。そこに秩序を見る人いたら、お目にかかりたいものだ。日の光はほとんど明るくなり、今では青空が広がっている。高くなればなるほど、木々の霜化粧は厚くなる。山の上に黒い奇妙なものが群れ集まっている。巨大な黒樅の木だ。白いシヨールをかけて山頂に立ち、谷に向かって説教をしている。

トランクと手提げかばんを預け、外套に手を突っ込んで、ぶらぶらと駅のホームを出る。人々が馬車に乗っている。だが、私にはたつぷりと時間がある。立ち止まって、どちらの方向に行こうかと考える。ザコパネの村はどこだろうか。その時、早くも私の様子をうかがっている者たちがいた。八歳から一二歳の少年だ。ぼろ服を着た、厚かましい連中で、最初は四人いたが、その後、六、七人になる。駅前の道ばたに寄り集まって、私の後をついてくる。突然、一人が私のそばへやってきて、話しかけてくる。他の者は私を取り囲んで、私の口元をみている。私は苦笑する。彼らの意図は分かっている。零細な家主の使い走りだ。だが、私は村をゆっくりと見たい。苦笑しながら、私は頭を振り、「ドイツ人です。わかりません」とポーランド語で言つて、歩き続ける。彼らは何やら言い争っているが、突然、ふたたび、私の後をつけてくる。私が立ち止まると、彼らも立ち止る。彼らと私の間には一種の物理学的依存関係が存在している。私たちは反対の電気をおびているのだ。だが、私には彼らが気に入らない。私は一人で行きたいのだ。私はドイツ語でののしつて、万国共通の怒り顔をして、道の反対側へ行く。連中は向こう側だ。くたばってしまった方がいいのに。連中がついてくるのは、何か私に原因があるのだろうか。そんな風にも考えてみる。彼らが道を渡ってくる。道ばたには並木が立っている。長い街道だ。この街道にそつて、村まで散

歩しよう。すると、少年たちが後をつけてくる。私は何歩かは我慢するが、それから後は振り向いて、わめき声をあげる。この語調も万国共通で、明瞭だ。彼らは何とか言つて、客を手厚くもてなしてくれるという宿泊所をふたび売り込もうとする。不潔な部屋を。警察官はどこにいるのだろうか。ここでは、ならず者たちから守ってもらえないのだろうか。そこへ、並木道を一人の男性がやってきて、私に目をとめ、私がののしるのを聞いて、ドイツ語で話しかけてくる。どうかしたのですか。少年たちがなんだかんだうるさく言つて、私の後を追いかけてくるんですよ。どうか、私は彼らの世話にはならないから、とつと立ち去るように、言つてくだされませんか。彼がポーランド語で彼らと話をしようには、彼らは近くに安くてよい宿を持っている、どうやらあなたは宿を探しているようだが、その宿を見てみるつもりはないか。宿なんか絶対に探していません。ぜんぜん探していません。彼らからはありえません。「森(三)の中を一人ゆく。なにを探そうあてもなく。」これが私の気持ちだ。この人は理解できないだろうが、私は考えを変えるつもりはない。私は熱烈なゲーテ愛好家だ。ポーランドでならこう言つても奇異な感じを与えないだろう。これから散歩がてら村へ行きます。

「村へですつて。この道は村へは行きませんよ。」

「何ですつて。村はどこにあるんですか。」

その時、不意に、その男性のとなり一人の娘が現れる。私はその娘が馱でうろろしているのを見かけていた。そこで彼女はじつと旅行者たちを眺めていたのだ。男性は言う。こちらのお嬢さんですが、あなたをご案内したいと言っています。村へ行かれるのなら、彼女が案内してくれるでしょう。ホテルかペンションを教えてください。すよ。ゆつくりさせてもらえない。何故、どうして、何のために、彼女は私を案内したいのだろうか。私は、もの言わぬ涼しい木陰を散歩してはいけないのだろうか。国家的に認められたドイツ抒情詩を体験させてもらえないのだ

ろうか。少年たちが待ち構えているそばで、男性は私に、その娘は良い宿をいくつか知っているが、彼女と村へ行く気があるかどうかと尋ねる。私の役回りはばかばかしいものだ。ゲートルで恥をかいた。タトラでは、ゲートルは理解されない。いずれにせよ、少年たちを厄介払いしなければならぬ。私は男性に、その宿が神に誓ってちゃんとした宿なのかどうか、そして、彼女がひよつとして個人的に知っているのかどうか、その娘に聞いてくれるように頼む。彼はポーランド語でいくらかやりとりしてから、今、教えてもらったが、それは評判の良いペンションだ、ここはシーズン・オフで不景気なので、皆、使い走りを送るのだと言う。「わかりました」、私は腹を決める、「彼女と行きます。有難うございました。それでは、どうかお嬢さん、子供たちを追い払ってください。」彼女は少しドイツ語が分かるのだ。男性が別れを告げる。少年たちは叱られると、ののしりながら道を渡り、こちらの方へなにか叫んでいる。私はその娘と一緒に行くが、村の方へ歩いたのは数歩だけだ。その時、彼女が思いついて言うには、自分には叔母さんがいて、ドイツ語がよくできる人だ、自分もその人のところに住んでいるので、私をそこへ連れてゆくほうが良いだろうと言うのだ。私はびっくりする。叔母さんがいるとは。それはそれは。彼女はその叔母さんのところに住んでいるのだ。叔母さんというのは、ドイツでは胡散臭い存在で、神話の領域に属している。聖書解釈は進歩して、神話への信頼を完全に動揺させてしまった。彼女と叔母さんのところへ行くべきだろうか。遠くはない、と彼女は言う。少年たちがいなくなつたと思つたら、今度は叔母さんだ。天気は素晴らしいし、並木道はとても気持ちがいい。落葉した黒い枝は愉快だ。この道沿いにあるのなら、彼女と一緒に叔母さんのところへ行つてはいけないというものでもあるまい。気分ははつらつとしている。私たちは向きを変えて、村に背を向ける。

さて、私を案内してくれる娘は Nusia という名で、ニユシャと発音する。ザコパネの章が始まる。

彼女は帽子を目深にかぶっていた。髪の毛は、見たところ麦藁色だ。中背で、黒のずいぶん質素な上着を着ている。靴はお世辞にもエレガントとは言えない。手を胸前のポケットに突っ込んでいるが、非常にしつかりした手だ。茶色の、破けた、ありふれた木綿の手袋をしている。彼女は泥道をたいては私より先に歩いて、時々、もうすぐ着く、と元気づけてくれる。年は二十歳だろうか。体格はがっしりしていて、都会的というよりはずっと田舎風で、腰がしつかりと発達している。会話がしばしば途切れる。彼女にはドイツ語がでてこないのだ。ようやく、ベランダつきの簡素な木造の建物が見えてくる。前庭を通ってゆく。彼女は一人の男と二言三言、言葉を交わしている。私は食べ物匂いが充満した、広くて暗い玄関の間で待つ。娘が鍵を持ってきて、右手のドアを開ける。そこは明るい大きな部屋だ。これが私の部屋で、気に入ったかと問う。そして、出てゆく。すぐにでも叔母さんを連れて来るのだろうか。

この部屋を見て、私は微かな感動を覚え、ここに滞在しようと思う。窓際には黒い大きな本物のグランドピアノがある。そして、かなり古い型のブラッシュ張りの家具。ここに住んでいるのは零落した人たちだ。賃貸しているのだ。そして、これらのものは彼女たちの上等の家具の遺物なのだ。ここは寒い。私は寒い部屋は嫌だ。なんてところだろう。しかし、私は彼女たちを幻滅させまい。ここは冷えるだろう。村へ行けば、ホテルですっと快適に過ごせるだろう。だが、私はここで別の快適さを予期する。感じのいい娘だし、私は彼女たちにとって大切な人間なのだ——いや、断ることはできないし、断りたくもない。ニユシャと一緒に、もう一人女性がやってくる。三代半ばで、だいぶほっそり、というかかなり痩せていて、盛りを過ぎてはいるが、若々しく、活発さと愛想の良さが非常に魅力的だ。私と少し言葉を交わしてから、二人の女性はひそひそ話し合っている——私はまだ外套を着た

ままだ——それで、何を笑ったり、話しているのか、と私が尋ねると、後から来た女性がニュシヤと話すのをやめて、「私ども二人、あなたがとても感じのいい方だとお見受けいたします。とても素敵ですわ。」この部屋は私には大きすぎて、落ち着かない。ベッドはどうなっているのか、と尋ねると、二人はさつと飛び出して、家の中の別の部屋を探しに行く。私は一人座って、ポロンポロンピアノを弾いてみる。ひどく寒い。ホテルではどうだったろう。私は自分のルームナンバーとベルを持っていた。ここでは二人の女性が行ったり来たりしている。煩わしいことだろう。しかし、二日間の辛抱だ。

戻つてくると、彼女たちは装いを変え、きちんと身繕いしている。ショートカットで、淡いブロンドの髪。鼻は赤く、上向きに反っている。手は荒仕事を物語っている。彼女たちは私を本当の私の部屋へ案内してくれる。そこで、私はしばしの間、愕然とする。これは、まあ、あんまりだ。それはまるで納戸だ。板壁で、壁際に簡易寝台の枠が二つ。この部屋は一階にあるのだが、カーテンがついていない。ドアには鍵がかからない。鉄の洗面台、テーブル、椅子、戸棚。これが私の部屋なのだ。

「暖房をしますので」と即座に言う。私は呆然として、ええ、冷えますね、と言う。

「それでは、熱い紅茶をお持ちしますわ。昼食も。」呆然として、「お願いします。」

年長の女性はまだ机のところでもじもじしていたが、やっこのことで、幾らか前払いをしてほしい、と口に出す。

「いいですとも。いいですとも。」私は思わず、考え込んでしまった。どうやら、彼女たちは昼食を調えることすらできないのだろう。支払いをして、彼女たちが出てゆく。窓辺に立つ。向こうにいたあのいまましい少年たち。場合によっては、あの子たちと一緒に行っていたかもしれないのだ。またしても、何てことだ。ここで何をし

ようというのだ。お金があるのに、こんな惨めな小部屋に入り込んでしまつて。外套を脱ぐことすらできない。ひどく冷えるのだ。帽子をかぶり、外套を着たままで、テーブルに座つて待つ。手が汚れているのだが、水もタオルもない。しばらくはここで我慢して、それから出立しよう。私はそのような思いに耽つた。

昼食が終わる。ニュシヤが私と一緒に村へ行きたいという。これまで、私は全神経を街路に向けてきたが、今回はニュシヤがそばを歩いていて、話をしたり、しなかつたりだ。それで、私は今では新しいことを学んでいる。つまり、彼女に注意を払い、彼女を観察しながら、同時に、風景を眺めるのだ。心の中のわだかまりも、隔たりも消えてしまい、急に、もう二ヶ月も前からここに住んでいるような気になる。彼女が、どこそこには何も見るべきものがないと言うと、私もすぐにいそいそと、お世辞にも見るべきものがあるとは言えない、と応える。こっけいだ、心からの応答でもある。長く続く道、橋、新築の家、右手には連なる峰々、それから村に入る。教会、保養地の商店が並ぶ静かな本通り、絵葉書や、織物。それらのものが、雑多な色彩と奇妙な陰影をもつて、私から遠く隔たつたところを過ぎてゆく。

立ち並ぶ瀟洒な別荘の間を抜け、広い散歩道を通つて、彼女は私を村はずれへと案内してくれる。上り坂だ。村は、教会の尖塔とともに、しだいに波打つ地形の向こうへ沈んでゆく。そして、眼前には、鋸歯状に連なる連山と茜色の夕空。錯綜する雲を見ているうちに、空で色が混ざり合う様を、その境目やそれらが滲んでゆく様を、余すところなく細部まで心にとどめておきたいと思う。それらは刻々と変化してゆき、とても興味深く、魅惑的だ。一方、ニュシヤはといえば、叔母のことや、彼女たちのひどい経済状況についてしゃべっている。彼女は両親を亡くしている。若くして亡くなった母親は、私が泊まっているところの叔母さんの姉にあたる。母親と叔母さんが私の中で雲の色調と競い合う。今は楽しくやっている、と彼女は言う。ドイツ語はとても精緻な言葉で、とても素晴ら

しい。でも、とても難しい。彼女には保養客の友達がいた。その彼からフランス語を習った。でも、今は「ジュ・スユイ・トレ・マルルーズ」しか言えない。どういう意味か、知っていますか。ええ、私はとても不幸です、です。その頃は彼女はとても不幸だった。だが、今は違う。それに、実際はそう教えてもらっただけなのだ。いつの間にか、上空はすっかり暗くなってしまった。まるで、印画紙を感光させるのに、うっかりと露出しすぎてしまった時のようだ。驚いて、明日も同じようであってくればよいのだが、このような景色を見るために、ここへやってきたのだから、と思う。それとも、何のためにやってきたのだろうか。私は、板壁の小部屋のことを思い、ふたたびぼんやりとして目を細め、何も考えまい、と思う。散歩をしよう。そして、早いうちに、ウツチへ立とう。ニュシヤは一人の農婦と出会い、話をしている。引き返す時間だ。彼女が私に隠そうとしている破けた手袋の中の手は、かじかんでしまっている。私はすっかり冷えてしまった。カフェはどこだろうか。細長い質素な店に入る。ほとんど貨切りだ。私はコーヒーを飲み、ニュシヤはケーキを食べる。その食べっぷりはどうだろう。ウェイトレスが運んできた見栄えのする大きなケーキをぺろりときれいに平らげるのだ。

夜、私はベッドカバーをひとつの窓に、タオルをもうひとつの窓にかけた。朝、タオルをはずす。体を拭かなければならないからだ。外は雪一色だ。灰色の空に雪が舞い、地面をかすめるツバメの群のように、空中を旋回している。地表に気流があるのにちがいない。雪はすぐには落ちてこないで、水平に向きを変えられ、なおいくらかを風につけて飛んでゆく。灰白色の天空ははるかに高く、どこまでも果てしない。森林は、山はどこだろう。ザコパネはどこだろう。すべてのものがこの天空にのみ込まれてしまった。ベッドカバーをかけたもうひとつの窓から、カバーのへり飾りを通して外を眺める。昨日の昼には、そこに山があった。まだ見えるが、ちょうど霧の帳がその上に降りようとしているところだ。何キロもつづく巨大な幕か、舞台の書割のようだ。帳は縦の森林に降り、山の

上からこちらの方へどっと霧が押しよせてきて、山の黒さを包み込んでゆく。昨日、唯一、黒いまとまりを見せていた山麓近くの木々は、音もなく下降してくる霧とその雪によって切り離され、寸断されてゆく。一本一本の樹形を霧が巧みに演出して、その輪郭を並べてゆく。

叔母さんからていねいな挨拶を受けるが、私は帽子と外套を身につけたまま、なお部屋にたたずみ、外の壮観を眺めている。何をなすべきか、私は分からずにいる。雪雲がしだいに山の上空に下降している。山麓は蒼く翳り、その上にはもう灰白色の雲霧がかかって、刻々と不気味に下りてきている。私は吹雪く世界の片隅のちっぽけな木の家にいる一存在にすぎない。そこから逃れることができるのかどうか、私には分からない。予期しない自然現象に見舞われたのだ。我々人間は神のみ手の中にある。この荒天のもっと間近に、もっと深くその中に入って行きたい。私は心をそそられて、行かずにはおれなくなる。家の中はしいんとしている。こっそりと出てゆく。ニユシヤは眠っている。私はふたたび自分の目で見るのだ。

並木道を村の方へ向かいながら、私は、自分がいまなお彼女たちの磁場の圏内にいること、後にしたあの家から発する磁力線の内部にいることを感じる。深い、やわらかな雪道を歩きながら、私の思考と感情は後方を向いている。私は、あてもなくあちらこちらを飛び回る黒バエのような存在ではない。休養しているのだ。私の中の何か、あの家とそこに住む人たちの感情の中で、彼女たちの窮乏や共同生活の中で、まだ休養しているのだ。私を駅から連れてきた、あの穴のあいた手袋をはめた娘。それから、子供たちを親戚に預けて、私にコーヒーを持ってきてくれたもう一人の女性。二人はあそこにいる。私には、すべてのものにうなずきかけるような、親しげな気分が同行している。裸のまま歩いているのではない。背後のあの家の衣服をまとっているのだ。

雪はどっさりと降ってくる。向かいの家も見分けられない。黒い小さなしみのようなものが、空に浮かび上がった

てくる。片面が雪におおわれた煙突だ。屋根は見えず、広い雪空の一部と化している。ふわふわの雪のうえを歩いていると、うきうきと楽しく、仮装舞踏会のようだ。降雪にはカーニバルのようなどころがある。通り過ぎてゆく人たちにもそれが作用しているのが分かる。愉快で入場無料だ。ちっぽけな生き物である私は、この自然現象にすっぱりとくるまって、どたどたと小さな木橋を渡り、サナトリウム、軍人の保養施設と過ぎてゆく。橋の下の凍結した小川では、少年が二人、歓呼の声を上げてスケートをしている。めいめい片方のスケート靴で滑っている。村は雪景色と日曜日の安息にひたっている。天の羽毛のような柔らかい雪が吹雪く中、村を通り抜ける。辺り一帯のまったき静寂が私を包みこみ、さらにその度をくわえてゆく。今、私がある中を歩いている霧の帳というか、雲があつくて、畑も山も見分けることができない。だが、それはどうでもいいことだ。画材に意味はなく、タッチがすべてだ。道沿いには、まだまばらに小さな家や別荘、農家が立っている。道端で、小さな溝を囲んで、白い一群れのアヒルが首をかがめている。アヒルたちは腹ばいになり、黄色い角のような嘴を細流の中に突っ込んで、ぴちぴちや、ごくごくとおいしそうに飲んでいる。舌を素早く鳴らす時のようなかまびすしさだ。アヒルたちから霧に目を転じると、まるで私の前にうち開かれるかのように、霧が薄れてゆく。大いなる静寂のうちに霧が開けて、ちりぢりになってゆく。すると、ずっしりと雪をいただいた、たおやかな連山が姿を現し、そこに立っている。山々は高木のこずえに積った雪を揺らしている。山々の背景や谷あいには霧がかたどっている。霧はたなびく靄となってまだ見ぬ谷々にたちこめ、山の背後で音もなく湧き立ち、もくもくと姿を変えながら、愛らしいふわふわの戯れの最中だ。私の近くに立っている樅の根元は緑色だ。それらは抱卵中の雌鶏のようで、下の方に羽を広げて座り、地面をおおって暖めている。こずえの白い頂は揺れて、風に震えながら、周りを見回している。

さらに深く、吹雪の中へ分け入る。吹雪はしだいに和らぎ、慈母のような穏やかな景色が現れてくる。村は盆地

の底に沈み、最後に教会の尖塔が見えなくなった。そして今度は、なんとという光景だろう。眼前のすべての雲と霧が、その全部すべてが、合図でもしたかのように上昇してゆく。シャツを持ち上げるように、山々が雲を持ち上げているのだ。靄は上空で団塊となり、山々はそれを下へ落としてゆく。

あちらでもこちらでも、山が目覚めた。小川が騒ぎ立て、怒りを爆発させて、石くれをいっぱい運んでゆく。私は、長く続く深い谷あいの道に入り込んでいた。あたりの静寂は去ってしまった。ザコパネの山地が姿を現す。あちらこちらで小川が道に氾濫している。小川は子供のように静かにすることを知らない。あらゆる形象が姿をあらわし、興奮し、大量に積もった雪もこれを静めることができないでいる。すぐ道端に四本の岩の柱が立っている。男性の立像のような、ほっそりした高さのある岩だ。妙に荒々しい形状をしていて、つい近づいてみたくなる。その間に立ってみると、それらが、大きな岩山から崩れ落ちて風化した岩石で、暗い黄褐色の、亡びることを拒んでいる頑固な岩だと分かった。それらは風景の中に荒々しさを持ち込んでいる。岩を撫でてみると、手につくのはなんだろう。二つの大きな六角の星。均整の取れた、見事な雪の結晶だ。私の皮膚が冷たくて、結晶が融けずにいる。なんと美しい羽模様だろう。それらの結晶は私の手の甲の細毛にかかって揺れ、あらゆる面から観察することができる。結晶は中心から発する三本の光線をもち、非の打ちどころのない、まさに完璧なものになっている。そのどこをとっても欠けたところは見られない。それを寒気が気ままに孕んだ。それは寒気の内部で、純粹な水から形成されたのだ。いま、二つの結晶が細毛から私の皮膚に滑り落ちた。おお、私の手はどうするだろうか。それはライオンの棲む穴のようなものだ。それらの結晶は体をすり寄せ、ぴったりとくっついていて。そして、焼結する、焼結してゆく。角の部分が持ち上がり、中央部が沈む。そして、収縮し、透明になる。水滴だ。水滴になった。雪は私のところへ、私の家へやって来て、私の服を身につけ、私の熱を吸収した——そして、死んでいっ

た。ちょうど、仏陀が金細工師の家で毒を食し、静かに亡くなっていたように。我々の存在とは、そのようにささやかな活動範囲の中を過ぎてゆく。そして、押しつぶされ、融解し、消滅してゆくのだ。「我々」というのは、私と雪片のことだ。私が踏みつけている、また踏みつけなければならぬ無数の雪片、私が呼吸によつて絶えずせつせと融かしている雪片と、私のことだ。

暮れ方、叔母さんがニユシヤとともに納戸のような私の部屋へやってくる。石油ランプが点される。叔母さんは創作をしている。そして、書いた物語について私に語り、それを翻訳してくれようとする。ニユシヤは猫を飼っていて、猫と長い会話をして、笑ったりキャツキャツと叫んだりしてじゃれあっている。すみやかに夜の帳が降りていった。夜はなかなか明けようとはしない。雪は止むことなく吹雪き、空から一斉射撃を浴びせるかのように吹き荒れている。外気は刺すように冷たく、そこにはもはや柔らかさのかけらもない。白い雪がどっさりどっさりくるぶしのところまで積もっている。連山はすっかり雪におおわれている。街道を行く馬車がよたよたと走っている。空はどんよりと薄墨色にちかい薄鈍色に色あせ、山々はその中に身を隠している。ゴーラルという土着民の御者たちがベルを鳴らしながら通り過ぎてゆく。体を横に向けて歩道の方を見ながら、辻櫛の前に座っている。私は大雪の中を、難儀しながら歩をすすめる。私は海の中にいて、小さな小舟を漕いでいるのだ。果てしない海原で。人々の顔が小さくなった。青ざめて、皺がよつて、厳しい。

村の通りには人影がない。街道には吹雪が吹き荒れていて、歩を進めることができない。「タトラ博物館」という看板を掲げた建物がある。入ってみると、入館でき、若い助手に会う。外では再び日が暮れ始めていたが、彼は私に所蔵の品を見せ、熱い紅茶を出してくれる。そして、美術学校のことについて話してくれる。それから、ここにはゴーラルが住んでいます。通りで見かけました。彼らは高タトラ山脈に住む山岳住民です。私は彼らが一団と

なつて教会から出てくるのを見かけていた。男たちは身の丈が樅の木のようが高く、並外れて体格が良い。中には、盗賊のように無法な丈夫振りを発揮する者もいる。彼らは「ギエヴォント」たちで、ザコパネの近くにある高い山をギエヴォントと呼ぶのだと、叔母さんが話してくれた。彼らは風変わりな白い細身のズボンをはいていて、腿の付け根下の前面に装飾品をつけている。頭には平たい帽子をかぶり、刺繍をほどこした美しい革の上着を羽織っている。生まれつき芸術的センスに恵まれた手先の器用な種族だ。ポーランド語の方言を話し、固有の風習を持ち、時としてアメリカ・インディアンのような感じを与えることもある。

暖かい部屋の中で、その親切なポーランド人は、彼らや彼らが住む山について、また、彼らの迷信や暮らし向きについて話してくれる。彼らの中には盗賊がいた。一人、非常に有名だった男が、一八世紀の末に絞首刑に処せられた。タトラの森には、今なお熊が住んでいるという。ここには、綿雲を駆り立てて吹くフェーンというものすごい風が吹く。この風は森をことごとく平伏させる。このフェーンがやってくると、雪解けが始まるのだ。

晩、激しく吹雪く夕闇の中をおぼつかない足取りで帰りながら、私はもう我慢できなくなる。ひどい悪天候に力がなえてしまうのだ。ニュシヤと叔母さんと一緒になお数時間、上階の彼女たちの部屋で過ごす。彼女たちは、私が企てていることを知っているのだ、少し悲しそうで、とても優しい。叔母さんがトランプで私のことを占ってくれる。お国へ帰ったら、私には大きな喜びがあるでしょう、とても大きな喜びです、すべてのこと、あらゆることが順調にゆくでしょう、こんなに良いカードはこれまでに見たことがありません。すると、ニュシヤは顔を輝かせて、そうよ、占いを信じなさい、彼女が私を駅から連れてきたとき、叔母さんは、一人の紳士が家にやってくることをトランプで占っていた、そして、それが私だったのだ、と語った。彼女は愛撫するように猫と取っ組み合っている。「ほら。この子はあなたの手にお行儀よくキスするわよ。ダンスが上手にできるの。とてもお利口さんな

のよ。」彼女は猫にキスし、キヤツキヤツとはしゃぎ、私にポーランド語で書かれた親友の手紙を見せてくれる。十一時に、彼女たちはランプを手に取り、私を階下へ送ってくれる。

私は暗い通りに立ち、歩き出す。駅へ行くのだ。行きたい、行かなければならない。

訳 注

(一) ザコパネ 高タトラ山脈の麓にある保養地。

(二) やつらは… シラー「ヴィルヘルム・テル」第四幕第三場

(三) 森の中を… ゲーテの抒情詩「見出しぬ」に拠る。ゲーテはこの詩を、一八一三年八月二六日の日付をつけて、妻クリステイアーネに贈っている。その丁度二五年前に、ゲーテはクリステイアーネと出会い、結婚生活に入っていた。

訳者あとがき

本訳はアルフレート・デーブリーン著「ポーランド旅行」の第八章にあたる「ザコパネ」の翻訳で、「岡山商大論叢」第四二巻二号所収の同書「クラクフ」の続きである。

一九二四年の九月末から二ヶ月あまりの間、デーブリーンはワルシャワを手始めとして、ポーランドの各都市を旅してきたが、それは決して物見遊山のような性格のものではなかった。彼がそこで一貫して求めたのは、独立後間もないポーランド社会の現状と人々の生活を自分の目で見、肌で感じることであった。しかし、旅行も終盤にさしかかった十一月二十日頃に、彼はザコパネに立ち寄っている。ザコパネはカルパチア山系タトラ山麓にある小都市で、クラクフに近い、ポーランド最大の避暑地であり保養地である。そこで、彼は東の間、そのような問題意識から解放されて、タトラの厳しく美しい雄大な自然と、その中での牧歌を享受している。